彩花新聞

Monthly SAIKA Newspaper

203号
2024年5月1日

仕事の使命

早いもので令和6年辰年も五月を迎えました。この季節は春の終わり夏のはじまりそんな感じがいたします。やさしい緑とツツジの色合いがなんとも爽やかです。
仕事の使命の条件とは「社会のお役に立てる具体的な何か」です。
「信念がこもっていなくてはならない」「お客様に貢献できる何かでなくてはならない」
「自分が取るべき行動が決定の指針となるものでなくてはならない」この使命を
組織で共有できるような経営をやって行きたいと思っております。
今後ともお引き立てのほどよろしくお願い致します。

骨折しました

3月初めに大変なことが発生しました。 草取りの見積りに現場を見に行った際、斜面で足を滑らせ転倒し、右肩の付け根を骨折しました。誰もいない現場でどうなるかと思いましたが、 車を止めているところまでどうにかたどり着き、左手で運転して家まで帰ってきました。 その日は土曜日だったため、急患センターまで妻が同行してくれ診察しました。そして、月曜日に整形外科に行き処置してもらいました。軽く考えていましたが、完治するまで1ヵ月半から2ヶ月はかかるとの診断でした。
それを聞いて、もう頭は真っ白になりました。
3月は1年で一番の繋忙期、猫の手も借りたいくらいの時期です。そんなことを考えても仕方ありません、なるようにしかならないとあきらめました。
会社は息子2人とスタッフに任せて待機するしかありません。動けないのですもの・・・
長男は3年前社長に就任していますが、創業者の私が横でうろうろしているので社長業に
専念できていなかったかもしれません。
この出来事が怪我の功名となり
息子の社長業に
拍車がかかったらいいなと思います。

我社の社員像

自社のスタッフは作業員でなくサービスパーソンを目指しています。そのためには、笑顔・挨拶を通じてお客様への豊かな環境提案をしなくてはなりません。
そして、お役立ちを深めて人間関係を作って行くことが大事です。「これだけしておけばいい」とか「売ろう」と言う気持ちで仕事をしてはいけません。
常に「何かをしてあげたい、何かお役に立つことは？」の気持ちで働くことが我社の社員像と思っています。
時間を惜しまず行動することで、お客様からの信用➡信頼と広がっていくのです。
そして、責任感を自分のものにして、さらに大きく成長していってほしいと思っています。
今の時代、インターネットなどデジタルが進んでいる世の中になっても、人と人の関りを持って、人と繋がった経営を目指して進んで行きたいと思います。

クリーン彩花 経営理念

- お客様を通じて人生が生まれ変わるチャンスにする
- 物心共に社員の幸せを求め続ける
- 他人には喜びの種まきをする
- チームワーク良く積極的な心構えで仕事をする

心のレンズ

心のレンズという視点は素晴らしいものですね。私たちは日々、自分の思考や感情を通じて世界を見ていますが、そのレンズを変えることで、新たな視点や明るい景色を見ることができるのです。消極的で自己否定的な考え方を積極的で自己肯定的な考え方に置き換えることは、自己成長やポジティブな変化を促す方法です。たとえば、退屈な日常に対しても、別のレンズを使ってみることで、新しい可能性や楽しみを見つけることができるでしょう。
「毎日が退屈でしかたない」と感じている場合、次のようなアプローチを試してみてください。
1. 新しい趣味や活動を探す：何か新しいことに挑戦してみることで、日常がより充実したものになるかもしれません。（例えば、アート、音楽、スポーツ、料理など、興味を持っている分野を探してみてください）
2. 日常の小さな瞬間に目を向ける：退屈な瞬間でも、周りの景色や人々との交流、自然の美しさなど、感じることができる素晴らしい瞬間があるはずです。意識的にそれに目を向けてみてください。
3. 自己肯定感を高める：自分自身を肯定的に評価し、自信を持つことは大切です。自分の良い面や成果を振り返り、自己肯定感を高めることで、毎日がより楽しくなるでしょう。
心のレンズを変えることで、見たい風景を選択できるというのは素晴らしいことですね。
自分自身のレンズを意識的に変えて、明るい未来を見つけていってください。

トイレ清掃員、レッドカーペットを歩く

■PERFECT DAYS

昨年のこと、世界3大映画祭の一つ「カンヌ映画祭」に、レッドカーペットを歩く“清掃員”の姿がありました。清掃員の日々を描いたヴィム・ヴェンダース監督の映画『PERFECT DAYS』で主役・平山正木を演じた役所広司です。役所はこの映画で日本人俳優としては19年ぶり2人目となる主演男優賞を受賞しました。映画は渋谷区内17か所の公共トイレを刷新するプロジェクト「THE TOKYO TOILET（TTT）」を舞台に、“平山”の謙虚な生き様を描いたものです。スカイツリーが窓越しに見える古アパートの2階で毎朝5時に起きて5時半には現場に向かいます。ひたすらトイルを清掃してまわる、まるで修行僧のような日常がほとんど台詞なしの状態でドキュメンタリーのように描かれていきます。平山は他人が残した「汚れ」を一寸の無駄もない動作で、淡々と綺麗にしていくことをひたすら繰り返していきます。その寡黙な姿は木のようにどっしりとしていて、尊く美しいとしか言いようがないものでした。

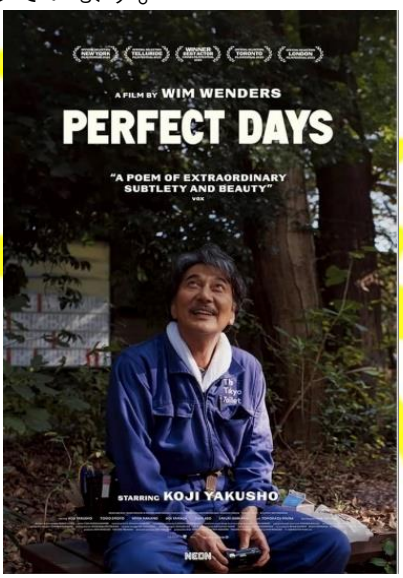
■「木漏れ日」に感じる幸せ

映画は一人の清掃員の丁寧な生き方を通して、より良く生きるとは？　満たされる人生とは？　という問いを静かに投げかけてきます。その舞台として選ばれたのが「トイレ」という現場であり「清掃」という仕事だったわけです。そんな地味な世界がカンヌ映画祭で反響を集めたというのは驚きであり感動的です。スクリーンには「木漏れ日」や「森」が繰り返し描かれていきます。平山は朝起きて窓をあけた時や作業の合間のふとした時に目にする木漏れ日や都会の中の森に穏やかな幸福感を感じ、何とも言えない素敵な表情をみせるのでした。役所広司の演技が光ります。今この瞬間にしかない、複製不可能なものと遭遇し、その幸せに包まれる一刻を味わうなかで嫌なことも静かにやり過ごすのでした。

■トイレ清掃員が教える「忘れもの」

トイレは排泄という人間の生の根元に関わるものです。排泄なしで生きていくことは不可能です。現代社会では誰しも心地よく生きていくために綺麗で快適なトイレを求めています。その根元的な部分を対象に「自分なりのおもてなし」として始めたのが THE TOKYO TOILETという公共プロジェクトだったと、映画を企画・立案した柳井康治プロデューサーはパンフレットに記しています。

また、「TTTの真の価値は、建築的価値のみでなく、日々汚れていくトイレを毎日毎日清掃し続ける清掃員の奮闘にこそあり、映画の力を通じて清掃員の皆さんへの感謝や敬意を表したいと考えるようになりました」とも。『PERFECT DAYS（完璧な日）』は、トイレ清掃に生きる一個の人間の生き様を見事な芸術作品に昇華させています。何気ない日常の中に小さくとも美しい「完璧な日」を見出し、深い喜びを感じる平山のまなざしは、仕事に追われ、情報や数字に翻弄される現代人に大切な「忘れもの」を教えてくれているようです。



現在、kino cinema 天神で上映中です。
オススメです、興味をおもちの方はご覧ください（らく）